

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

気楽に愉快に村おこし！豊かな自然と「結い」の心が育む溪流の里

みつまたしゅうらく
受賞者 **三又集落**
あきたけんよこてし
(秋田県横手市)

■ 地域の沿革と概要

三又集落がある横手市は、平成17年に旧横手市が周辺7市町村と合併して誕生した、人口で秋田市に次ぐ第二の都市である。秋田県南部横手盆地のほぼ中央に位置し、東に奥羽山脈、西に出羽丘陵を望む。総面積は693km²で、農地が約26%を占めるほか、多くが山林である。農地の約90%が水田で、水稻を中心に野菜、果実、畜産など多様な農業経営を行っており、農業産出額が県全体の16%を占める県内有数の農業地域である。また、本地域は内陸盆地特有の気温の日較差が大きい気候であるほか、雪国秋田を代表する積雪地帯である。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

三又集落（以下「集落」という。）は、横手市中心部から南東へ約20kmの横手川の最上流部に位置し、岩手県と県境を接する戸数89戸、262人が暮らす山間地域の小さな集落である。雪国である秋田の中でも特に雪深い地区であり、特別豪雪地帯に指定されている。集落の大部分を山林が占め、農地面積は約64haとなっており、農地の半分は水田で溪流沿いの狭い地形に点在している。集落では、主に水稻、葉たばこ及びそばを作付けするなど農業に意欲的に取り組んでいるほか、イワナの養殖が盛んである。また、集落は

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	28.0% 総世帯数 31,807戸 総農家数 8,920戸
専兼別農家数 (内訳)	7,176戸 専業農家 1,374戸 1種兼農家 1,382戸 2種兼農家 4,420戸
農用地の状況 (内訳)	耕地計 17,900ha 田 15,600ha 畑 2,260ha 耕地率 25.8% 農家一戸当たり耕地面積 2.0ha

※1 H22横手市の数値

※2 四捨五入のため計と内訳が一致しない場合がある

「いぶりがっこ」発祥の地とされ

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

むらづくりのきっかけは、集落が長年培ってきた風習や共同作業が廃れていったことである。

様々な業種に就く兼業農家の増加により、地区の共同作業が行われなくなり、営農の規模縮小や耕作放棄地も目につくようになった。住民は、コミュニティ崩壊は集落の消滅に直結するとの思いから、後世に集落や相互扶助の精神を引き継ぐためには、住民間の交流を深め、コミュニティや農地を維持することが必要と考え、むらづくりに取り組むこととした。

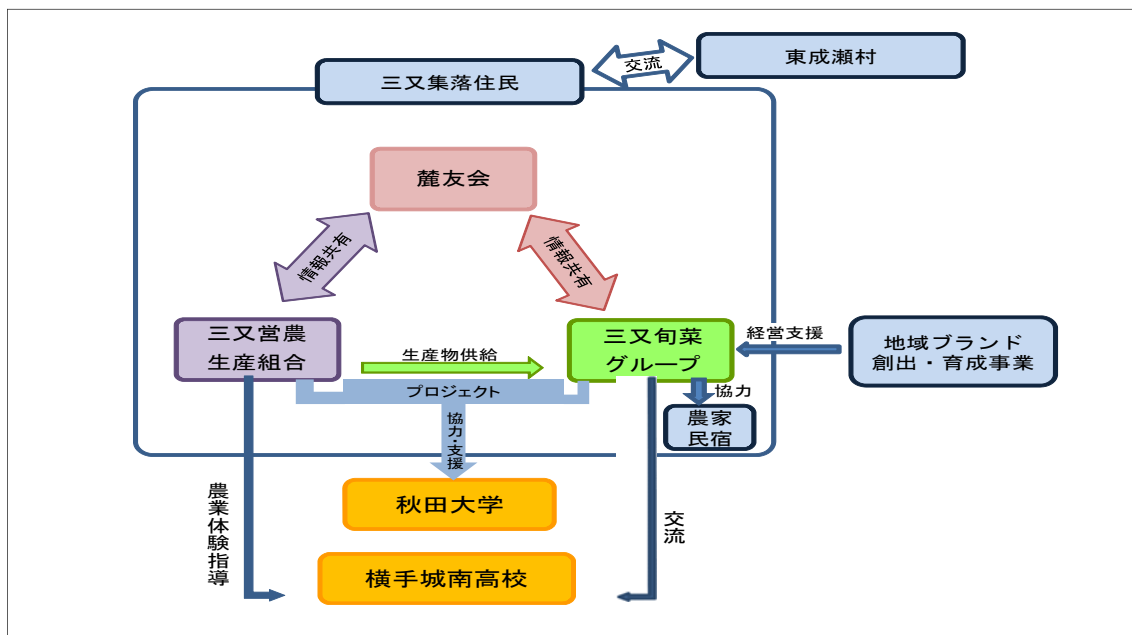
イ むらづくり組織の設立

集落のむらづくりの重要な位置を占めるのは「麓友会」である。集落では古くから、田植えや稲刈りなどの作業を「結い」という共同作業により行っており、「結い」を後世に引き継ぐため、集落の道標となるよう、昭和60年に当時の自治会役員が「三又部落自治規約」を定めた。翌年には、様々な職業の若者10名がより機動的にむらづくりに参加するため麓友会を結成し、活動拠点となる「麓友館」を建設した。

(2) むらづくりの推進体制

むらづくりは集落の自治会が担い、これに連携する主な組織として麓友会、三又営農生産組合及び三又旬菜グループがある。また、教育機関、金融機関及び民間企業がそれぞれの得意分野で集落を支援している。

第2図 むらづくり推進体制図



ア 自治会

集落の住民が6班に分かれ、それぞれに班長を置き、全体を区長が束ねている。毎月開催する役員会で、集落のあり方や行事などについて話し合い、それを班長が住民に伝達し、意見等をくみ取り役員会にフィードバックしている。

イ 麓友会

麓友会（以下「会」という。）は、気楽に、そして愉快地に村おこしを推進するため、集落内の様々な職業の当時20代から30代の若者10名が集まり、昭和61年に結成された。会では、「遊び」も活動の一部として溪流祭りや雪中運動会などの集落のイベントを企画・運営するほか、横手川上流域の清掃活動を行うなど、むらづくりの牽引役となっている。

ウ 三又営農生産組合

三又営農生産組合（以下「組合」という。）は、平成18年、集落の農地保全等を目的に27戸、20haの規模を持つ組織として設立された。組合は、作付けが困難になった農地の維持を担っているほか、複合栽培にも取り組んでいる。

また、耕作放棄地を整備した観光わらび園、直売所等の運営により成果を上げているほか、一般企業や大学生、高校生の農業体験を受け入れて指導するなど、集落の農業振興を力強く推進する役割を担っている。

エ 三又旬菜グループ

いぶりがっこなどの伝統食や地場農産物、山菜、キノコなどの地域資源の価値を見直し、所得の確保と高齢者の生きがいづくりを目指し、平成20年に「三又旬菜グループ」（以下「グループ」という。）が結成された。グループは、組合の女性部を中心に6名で構成され、伝統野菜である「山内にんじん」や大根を用いて当集落が発祥のいぶりがっこ等を製造し、県内外へ販売している。



写真1 いぶりがっこづくり

第2表 主な組織の取組

組織名	具体的な取組
ろくゆうかい 麓友会	<ul style="list-style-type: none"> ・横手川上流域の清掃活動 ・溪流祭りの主催 ・雪中運動会の実施、春・秋祭りの協力
みつまた 三又営農生産組合	<ul style="list-style-type: none"> ・組合員が供した農用地における稲作、ソバ作等の農業 ・観光わらび園の運営
みつまたしゅんさい 三又旬菜グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・山菜などの採取、加工・販売 ・「いぶりがっこ」の製造・販売

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 集落の強い結びつき

集落には、今もなお「結いの心」が生きており、住民同士が相互扶助の精神に基づく強い絆と信頼関係で結ばれている。それゆえ、互いに語り合う機会が多く、住民自らが地域の現状を認識し、今後のむらづくりの方向性を顔を突き合わせながら議論している。

(2) 「外部者」の受入れ

集落では「地域のにぎわいを持続させたい、農地を守りたい」という強い思いで取組が行われてきたが、集落外の人材やノウハウを積極的に活用し、集落の維持・発展につなげている。

ア 秋田大学生とのコラボ

平成21年2月の秋田大学横手分校の開校を契機に、「秋田大学オフィシャルいぶりがっこ製造プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）」が始まり、集落の組合とグループが協力・連携し、いぶりがっこの製造・販売に取り組んだ。新たな視点からいぶりがっこの良さを発見するなど、集落に新しい風が吹き込んでいる。

イ 金融機関等からの支援

平成23年11月には、いぶりがっこを製造する独自技術の保持と継承の取組が評価され、地元金融機関等が行う「地域ブランド創出・育成事業」の支援対象としてグループが選定された。

当事業は、秋田県の基幹産業のひとつである農業に、加工、流通、小売、海外販路拡大などを組み合わせたアグリビジネスを軸にした産業の

育成を目的とするものである。グループは、いぶりがっこを秋田県発のナショナルブランドとするため、市場分析やブランド力向上、商品開発、販路開拓などの支援を受けている。

ウ 企業や地元高校生との交流

組合では、大手米穀企業の若手社員や地元高校生の農業体験を受け入れており、集落ににぎやかな声が響く一大イベントとなっている。この交流を通し、農業のすばらしさや食べ物のおいしさを伝えている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 世代と地域を越えたプロジェクト

組合及びグループが秋田大学生と連携したプロジェクトでは、大根の播種から漬け込みまでの一貫した作業を行い、いぶりがっこ「いぶりばでい」を共同開発した。平成23年には3,500パックが完成し、地元スーパー等のほか、インターネットでも販売した。プロジェクトを通じた学生との交流で集落に活力が生まれ、若い世代にも伝統食のいぶりがっこが受け入れられている。当初は3年間のプロジェクトであったが、大学生の熱意や地元企業の後押しもあって継続され、いぶりがっこの製造技術が引き継がれている。

(2) 農業振興と所得の拡大

ア 組合の取組

① 基盤整備と共同作業の実施

組合では、平成12年度から中山間地域等直接支払交付金を活用して山腹水路を整備した。また、高齢により営農が困難になった農地に共同で水稻を作付けして農地を維持管理しているほか、複合栽培にも取り組み、大根や伝統野菜である山内にんじんなども共同で作付けしている。収穫された大根やにんじんについては、グループへ提供し、いぶりがっこに加工されおり、グループと連携して6次産業化への取組を進めている。また、山内にんじんの一部を県内の食品加工会社へジャムの材料として提供している。

② 観光わらび園や直売所の運営

平成20年、集落の耕作放棄地2haを観光わらび園に再生し、平成21年にオープンした。観光わらび園へのリピーターは多く、入場者数は平成22年約130名、平成23年180名と順調に増加しており、うち約9割が県外からの観光客となっている。



写真2 観光わらび園

また、平成22年には農産物を売り込むため、横手市に直売所「ベジトピア」、集落内の診療所前に「三又山菜市」を開き、精力的に活動の幅を広げている。

③ 後継者の育成

平成19年から、地元の高校生約30人を招いて山内にんじんの播種と収穫体験を行っており、地域の農業を学ぶ機会を提供している。また、農作業体験終了後は麓友館ろくゆうかんで伝統料理を囲みながら交流会を開き、地域の農業や生活、農産物のおいしさを伝えるなど、後継者の育成にも努めている。

イ 集落外との連携

平成21年、組合が受け入れた大手米穀企業の社員研修を契機に、集落の1等米全量を同社へ販売することとなり、農家所得の向上に大きく貢献している。また、天日干しした稲わらを集落内外の畜産農家のたい肥と交換して循環型農業と有機栽培にも取り組み、品質の向上に努めている。

ウ 三又旬菜グループによる販売活動

グループでは、いぶりがっこ等の試食販売活動を行って集落の魅力をPRするほか、現在はインターネット等による販売も展開している。グループの活動によって、継続的な取引が行われており、平成20年は約300万円だった売上げが平成23年には約700万円と順調に伸び、販路拡大や女性の雇用増大につながっている。

(3) 都市住民との交流等への寄与状況

平成22年6月に横手市全域がどぶろく特区に認定されたことが後押しとなり、組合に所属する高橋夫妻が平成22年9月に農家民宿「三又長右エ門」みつまたちようえもんを開業し、地域の観光人口の増加に貢献している。大人数を受け入れる場合は、集落のお母さんたちが食事を作るなどの協力を行ったことにより、民宿経営のおもしろさを肌で感じた女性たちの中に参入してみたいという意欲が出始めており、今後の展開が期待される。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 雪中運動会の開催と祭の復活

昭和55年から住民有志が始めた雪中運動会は、平成2年から会が主催しており、雪壁迷路を作るなどして大会を盛り上げ、地域になくてはならない催しとなっている。現在では、雪中運動会の開催に合わせて集



写真3 第32回三又雪中運動会

落の伝統行事も行われるなど年々盛り上がりを見せている。

また、自治会では6班を3つに分けて順番に祭りを運営する仕組みをつくり、皆が参加できる祭りに再編した。現在では、「集落の祭」として郷土芸能の「三又神楽」やかくし芸などを行い、趣向を凝らした企画で大いに盛り上がっている。

(2) イルミネーションと「遊水ゆうすいの里」

平成4年、会は集落内の砂防ダムの落差を利用した自作の水力発電設備を設置し、集落を一望できる山の頂上にイルミネーションを完成させた。

また、平成11年には県が整備した溪流の水辺空間を活用するため、補助金と会員の出資で水車小屋を建設し、同地を「遊水ゆうすいの里」と命名した。平成15年からは8月14日にイワナのつかみ取りなどを行う溪流祭り



写真4 溪流祭り

を毎年開催しており、集落内外から約200人の親子連れが参加している。

(3) 幅広いコミュニティ活動

集落の多くの世帯は、隣接する東成瀬村にあるお寺の檀家であるが、集落と東成瀬村を結ぶ県道が冬期間には雪により閉鎖されるため、昭和59年から冬期閉鎖前に交流会を始めた。現在は毎年8月と10月に交流会を開催しており、行政区を越えたコミュニティ活動を積極的に行っている。

(4) 地区内の景観づくり

会は、平成9年から地域の河川敷に桜の植樹を始め、現在では約2kmに渡り40本ほどの桜が春に花を咲かせている。